

パーキンソン病医療の最新情報

iPS細胞治療の現状

専門家の多くは 有用性を否定

パーキンソン病患者のうち希望者6人を選び、今年中に5年間の臨床実験が始まる見込みです。し

京都大学の山中伸弥教授が作製し、ノーベル生理学・医学賞を受賞したことでよく知られる「iPS細胞」は、当初からパーキンソン病の治療にも期待できるとマスコミ報道で取り上げられてきました。パーキンソン病は神経伝達物質のドパミンを作る神経細胞が減少することで発症するため、iPS細胞からドパミンを作る神経細胞を作って患者の脳に移植すれば機能回復を図れるというわけです。

しかし、多くのパーキンソン病研究者は以下の理由によりiPS細胞移植による治療に否定的です。

- ① iPS細胞でドパミンを作るだけでは、治療は終わらない。パーキンソン病の脳内ではドパミン以外にも、多くの神経伝達物質が異常低下している。
- ② iPS細胞により脳内でドパミンを作るとは、レボドパ内服療法と同じことである。
- ③ iPS細胞で作られた脳内ドパミンをコントロールする方法が確立していない。
- ④ 現段階ではiPS細胞治療により細胞や組織にがん（奇形腫のような腫瘍）が生じる危険性があり、脳内の場合には発見や摘出も困難である。

⑤ 5年程度しか効果が持続しないため、患者は5年ごとに脳の手術を受けなければならない。

パーキンソン病治療において、iPS細胞移植による治療は、現在ある治療より優れていると言えないどころか、有用性には問題があるでしょう。

新薬開発促す

iPS細胞の利点

新薬の開発については一定の利点があります。病気の患者から採取した細胞からiPS細胞を作り、神経や筋肉の細胞に変化させて病態を再現することで薬の効果や副作用の検討が容易になれば、

それだけ早く新薬の登場が期待できます。また、脊髄損傷などでは運動神経の移植により機能改善が期待できます。ただし、依然として腫瘍発生のリスクは残ります。

iPS細胞について、一部マスキミの不適切な取り上げ方やその内容には問題があると感じます。一喜一憂しないようにしましょう。

【公開講座のお知らせ】

パーキンソン病になると
どうなるのか
— その生涯を知る —

参加
無料

- 講師 高松神経内科クリニック院長 山本光利
- 日時 3月26日(水)午後2時～3時
- 場所 県社会福祉総合会館1階 大ホール(高松市番町)

〈問い合わせ先〉
☎087(873)2228(同院)